KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
623

天明六

初懷紙

去年の秋余の友あるの首途せんとせしに
社中のかたこと謂堤の輪漾亭にて離盃を
挙て惜しの別をおしみぬ
残菊さきあしと契る酒金香
洛東乃塩山亭をさるとて
帰るべき日も松にうつる月の秋
栗津の義仲なる芭蕉堂にて所見法師
の剃刀にて髪の俗塵を拂ひ侍る
稲刈て妻子田うへ我世の分

美濃近江の境をるて水ゐる小溪さ分入
丹山碧水羇旅の目をよろこばしむる
迅速の感をなのさむ

ふるさとの月を見るあるあるあるあ

九月尽の日蛾捨てゆくあ

月の夜を泣佐作てや果の秋

善光寺の路人の家さ二日さう生てかる

ささ市佛のあるうちう旅てやりた

因縁のありうるさ

[illegible]

武江年着て深川のさ生活れる

祖翁の正當今さ遇

芭蕉忌や雪ゐる夜の痩もあて

雪中庵と東海寺おして往事をうる

沢庵さやしと関のみちる

桑里登舟古友尼の徒の案内さ上野の

ちこのおりをんめるて

下りさ又帰きやれ

隨時の成美にて墨水流布
舟を送る人々の名残のなごりよりいとゝ
幽懐却テ客情をうごかす
我舟下おくて合せて都なる
梅の居の三の法印の喫茶會に招かれし
あるじの風流の昔の涼及の趣あり
江切の蕣や窪てんるはみ川
かくて京都に月の両回圓するをつんで
あるハ貴分公子の席に昇りあるハ
家にの俳士に命じあるハ師宗阿居士
の昔夜半亭を結ぶる石下の陸橋のなく
旅窩にこの續一夜松を輯集せんのまくし
既事成て西に帰る日雪中老人をもてめ
數車の騎客品川の涙に送いの鶴
をとゞめ離情意こゝにて盡期ハ
時に雪更庸を岸て讃て日
島々せわた東西をはこのゝ蓼太
此一句平分亦して平生を歩をはこむ

ほとゝぎす日を経て名残の草の葉年
歸着ぬ　しいらを旅の常を楚人冬
なゝ　ほゝ　ゝ　むの　ゝ　ゝ　かつ　ゝ　の
初懐紙のひゝく日とゝ　ゝ　ゝ

ゝ〳〵其冨士をしろゝ柳ゝ

天明六歳丙午春正月　　春夜主人識

中村俊定文庫

俳諧之連歌　　几董

ゝ〳〵其冨士をしろゝ柳のれ
伯樂あり　て　ゝ　ゝ　あゝ　駒　春坡
千俵の米ゝ　ゝ　捌ゝ　ゝ　ゝ　之兮
門ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　川岸のさし汐　二村
其こゝのひゝ　ゝ　ゝ　羽打ゝ風吹て　自珍
蛙蕙夜　嘘ゝ　三里来る雨　楚山

翌朝切腹すべく菊たてけ　熊三
友引して融明る春　丁容
一休のおしをきを小僧とも　桃李
涙ながれしあゆきの中　是岩
炯禍を巨燈のかるる宵の酒　賞山
妻と呼ぶ方をかこち草　其汀
若の女は星まつり　紫芳
月下鳥の囀てちん　路曳

のけ香ゝ公家侍のかけ〳〵て　魚赤
ゑ〳〵出て百年腰の下駄　橘仙
新吉の立せのへる　花の色　正巴
眉ゝ春の鐘ハ遠ク日　雲裳
南なる〳〵舟漕のへる春の水　淇水
尼の城下の養子振舞　其韵
惜まれて住世のある家建て　湖陸
脇目も〳〵一向一心　楚天

狩の杖まなびられる心つゝ　晴風

田の草とりて寂る星人　一兄

こゝろあを悲ある中と見れるし　梅女

清水に良友を乗れる小鏡　春香

はるゝと俄ゝ咲く勝負口　媒之

鹿の勝ひきまれり　志逸

秋の夜の月ハ絶るる涼舟　湖柳

出時ハも川ちより飛　素心

時あれば乞食の茶の湯ゝ　東屋

物乎とゝ為るかゝるの癖　雷丈

おろかれるはかをを祈すの昔より　松化

おゝれよ天空ゝ　杉月

花や今三ゝ月の調る夜半楽　湖嵐

松と梅とを畳ゝ　末廣　菱湖

祝詞

一条院御時花有喜色といふ心を
よみ侍りける　刑部大輔兼盛

君の世にあへる花は誰もみな
いそぎけふこそ見るべかりけれ
のどかにも春をかすめる
幸にあひぬる春の夜を半ばなりぬ春の宿

浪華舊國

君のとの向ふをそうてよむ
こゝろ大きゝとしとかや
けふ白もて大江の更より
賀しやけふ白もて
けふの命けふ　拾遺抄

當座　各詠

梅の花先うへなれば元の都うの花　湖柳
去年うゑてすみなれし猫の恩　淑富
うゝ玉や袖に玉ゐ人形　熊三

九中のある空や　之兮
うぐひすと東帝や春のみてさらん　志逸
若草や嘶くあとの石の傍　春坡

當日文信　浪華　東武

かくれあてなしてのぶくり　梅女
東風や吹ひろ吹ひろ　二村
玄圃の雪消んとすれば　楚山

其引

漬餅や赤きく沈む　寒の水　路曳

餅屋八盛のくくり、ろん　割可容
清雪や清き泉の水の隈　是岩
なの玄能や地ゝ千金の赤の畫　涼風
大ゝやしゝせしのとゝ釜　魚赤

郊外

畑作法　乞秤堀やうめ赤　自珍
やう羽子や衣紋ゝとる　訪侍　橋僊
壁ゝゝ家公合せやう傀儡師　雷夫
芹摘や地上の君う脛　五寸　媒之

下駄や鎌倉ゆく途草履屋　素仙
紅梅や武家に隣る門徒　菱湖
降とけば庚申の面やタぬれん　其訂
松とりて旅にさらす日をかさねけり　春香
歯朶に旅く人もつれ　加芝居　杉月
神ぬぐう鳥帽子のゆくり松の茶　南昌
去の夜や酒の名をぬみあるを窓　貫山

同日　文音　伊丹　浪速

帽子着て女すてを出し春のうゑ　東尾

脱捨て茅屋あらしに芹の中　嘯風

春興　少兒　米松

うとうとひまや鳥屋のうらに帰て居る
晴ひくれば日ハ狩廣さ　春　春坡
山笑ひひきの難ずる風もぬし　松鳥

其引

五六町　世尼ちさて　陸のたむ　亀兮　少兒
よく上ケておくれの波ハ　几巾　少年　松鳥
松に沢ふ竈ていまる柳ぶ　婦人　万佐

正月十三日　初會　於塩山亭興行

俳諧之連歌

柳筥ゝ揺らゝ〳〵ゝ　葦が原　道立

いとゝ花ふ動く翠簾の節〳〵　九董

悠猫のまにみをつし繋の迹て　正巴

蒔ゝ落ぬの身ハ半そら　維駒

きゝあゝ古ゝ家あゝ雨　春坡

主従三人秋の宿ふむ　松化

あさゝ冬しよ老とゝんゝハ紀世吉　桃李

おゝ冷ゝものゝの消て涼き　佳棠

六月の暮ゝちゝ呂まゝゝ　燃芳

扇のゝゝ手ゝ恋の迷文　花亳

起臥の世話ゝあゝる家ゝ屋　道栄

ゝゝ和表ゝあゝてハある　買山

習のゝを盛とゝん　花手丹　之兮

水益沢ゝ川のゝる　窓　執筆

席上探題

長範の松ちかのひて猫の恋　正巴

蝶〳〵や枕てやすらふ家の軒　維駒

造帆の風ちかき掛やすめ雪　桃李

蒸すなる古く家屋や烏帽子打　之竹

ちるもおそし嵐の中の空雀の声　春坡

雑子なく〳〵や夜上杉の屋敷跡　松化

飛さくら〳〵水ちらさく畦の花毫　花毫

高取の城ちかもの水　道榮

梅柳ちかや都の煮賣茶屋　紫芳

とまるへく花なるもけり帰雁　佳棠

春有誰家

具足町や祇園の梅のあるし臭　道立

閑日渉以成趣

就荒ちかけの都みるもち　九董

鶯や小笹おしなし谷越して

正月廿五日 於盥山亭興行

俳諧之連歌

來らしを老ほれの梅　歸樂

むしさく光は春のあつさ　几董

桜貝もちもあつめや擬らん　春坡

御前去ラれの十人の席　松洞

還きこれは酒のか減りて度文て　芦江

扇しめりぬ藪眠る坊　貫山

當座

あをやこころきゆるれ我居寐　芦江

おほさすのひゆもつてゆ風る　松洞

そら白の皺あのきれや去乃雨　婦人 几代

下荻了痛速ハ去ぬ鹿の後　貫山

殷勤して足ふむ人や忘の場　春坡

其引

志あいと嘘ハ味なきはのてる　釕脉先生 東瀛

らくとうか金採みのひろつふ あふくそゆうき　几董

[illegible]ふの中の白菫　芦皓

伏見社中書位三句

鶯の餅[illegible]の[illegible]　其韵

足袋脱てあるき安さ　郷雨　楚只

[illegible]の表や仮寝の人の脱ぬも　湖陸

但馬社中文音七句

[illegible]の舟[illegible]暖[illegible]春の駒　雲裳

[illegible]の丈の伸る東[illegible]　蛙[illegible]　淇水

五[illegible]伏見の[illegible]の風　黒人

鶯の山家[illegible]　柳水

玉打や藁[illegible]家中町　周山

梅の花なの[illegible]　百歩

[illegible]宿[illegible]八[illegible]月　朱厓

春雨や蚕なる　男の子　東奥　谷水

摺の上[illegible]風[illegible]て　春の水　定雅

篭[illegible]榾拇　痩けり[illegible]の風　九董

水満清江花満山

棹させハ梅の浮まる小舟哉　之竹

たゝもゝんとも宿り居る　九董

塵運ふ鳥の工みもせぬ日ゝ　〃

屋ゝんなく晴てのの身　竹

新米を関の東へ賣勝し　〃

庵帰りなれ松かゝて越　董

さゝもの咲ゝ家を達者ゝ海辺ゝ　〃

陽の医師をもつたゝき友　竹

友を宗と普徳寺の窓明て　〃

枯色ゝ成松ゝ香ひる　董

山伏の来ハ女のゝゝ宇里　〃

文持ゝ曲突のゝ　竹

隙代ゝを七日八日とゝれの身　〃

翌ゝん除不二ゝよりゝ秋　董

木陰の下ゝかゞしゐつゝ　菫

廣く世に布　寛永の錢　兮

もろ人を閑堂の書に白ふ箱　丶

うちわに扇に光る春の日　菫

春興二句

めゝあゝや奈良の古寺の春の雨　之兮

鄰燭生ずしめる良夜る扇哉　丶

下萌や丸太こゝかゝる嵯峨の町　松化

水の日なゝの壁ゝ如けるゝ　九菫

風後く黒きあげ羽の蝶　丶

つのゝを撫ゝ羽位の人ゝ　化

糸竹や月のこのたゝも麗ゝん　丶

耳しゝと聳る艸の堅の家　菫

樵しを秋八十とをの世を安く　菫

くまの子の嫁乃良もつんつゝ　化

もとかゝる盃事の下小来夏て　丶

次あゝ巨燈へぐたと霧ふ　菫

浦の景白く化るるハあのうち　丶

あゝ旁ゝ十五夜乃月　化

あゝみのやはも着る　鏡兎　丶

あゝ京乃ゝゝ中　菫

唐士のまつむ　外屋放左衛門　丶

今ゝそのの伊達小神ゝと　化

ゝの青面塔ゝ　丶

紙燭の前ゝ白ゝ山ゝ　菫

ゝ奥

てゝけ梅其角う枝のゝけ目　重厚

是聖護院

おゝゝ来や去来屋ゝの竹乃月　九菫

去年鮮魚を留守の屋敷へ
塩山亭より贈る

冬一日かすみの中のをかの山　厚

布子うち着て出かけるの　正巴

酒籠ぶら下げ馬を繋がん　桃李

梅の股下　風冷ゆる　春坡

嵐かすをのうちを出る月　巴

形を変る五位の鷺を　厚

山雀下りうきを重ねて書たる　坡

誓ひ恋のあるも哀　李

ゆるゆると鳴門をこぎ出る　浪の船　厚

還城楽を端唄にて　巴

おくまなる邦人並のうなみて　李

もろこしまでも花　坡

陽炎の小舟浦のあるうら　巴

蔭に告る　里下りの友　厚

敷くて猫の嚏をとがらん　坡

菓の辛みも白し　板の月　李

泥のなる砂糖の坊の月　厚

書よむ紀の肌寒ましし　巴

卜畧

春奥二句

鴨の脚乃ち新しめや春の水　正巴

新酒酒　啜さくらさるるの　重厚

かくして木芽煙むやちぢの月　星府

我ひとり庵さるなりけり春の風　机月

斛ゝ石の奇鳴の前や草ひの雪　朶雪

一羽来て二羽来て乃のふこの風　竹外

ふ千酔人扶ケ乃ふ　赤雞

恋ゝ迄千ゝ恋ゝ桜かな　蕙洲

初午やおもひ深てよく布子着て　田福

池田社中

誠華千馬を寫されば
立圃の昼詰ようやく
されば句調も渠に敬して

千金の春や初茶の午のとき　雲水　月溪

今の茶半先生のもとへ
東武より行る

春の富士元旦をさそうれ　在江戸　如瑟
むせぶかと酌のきく春の寒さ　田原　毛條

卯庚申

此猿は去年の猿を猿まし　碩義　里隣
酒なくて鶯啼ぬあ兄の名　呂蛤

白屋春　善光寺社中

咲ちらし飲あくるは梅一木　路人
二三尺鯉飛あうる加蝶うか　柳荘
猫の妻やせ出て恋さけり　文兆
敷ちつ大きれ春やうのみ光れ　呂吹

上田

ちれ井を握りつあり春の梅　雲帯
客中吟
このしや三月裂るちら河　九董

其引

難社中

夜もすがら鳥のね　士川

白濱や和布の枝や面の色　士雪

田つくりや鍬の形をむく白　士巧

八專のはつの孫や梅雨中　佳則

兵庫

蚤の夜や猫なて色の女　来色

ちらせいよいよ醜し河豚の面　里由

青面の桂我へ作あるく賣　清夫

而もこれ這り艪や石ころの寄節

雪とけや金高人の屋しき沈　来之

麥こやや時なる雉の片ゝ屋池

静座百五十翁

ちぎれみ横川の奥ゝ火の氷杜口

京にて

小京女を大根にして子は日の形　江戸　栄沙

酒籠のうしろ寄て彩の梅ふる　湖南　巨洲

蛤や酒あり宿の面来や　五来

其引

ふとひすがら大名小路あけぬ　管鳥

野も畑もとろ〳〵の雪解水　雨調

流るるよりむり春の水の面　社葵

弁当のひらきはしらの蛇苺　柘雨

面の日や梅のつぼみよりそめ　徳叟

柳二本影ふたつ日のみ　舞閣

鶯も一ぬりの鐘も初音の乱　五雲

暖篭こ日のゆるくもりや店おろし　浪華　銀狐

梅うの香の深草乃や日の歩み　邦調

走るなて水田のちりぬ梅のたち　百樓

鶯や一ふるみのて来と来　二俵、京南

去年の春京の答拝大井の
いの〳〵成佐るやきと今の
米半亭の主人ゴナきとて

〳〵作ひ〳〵都の仮ゆせ　武江　恭里

笠ぬて休やハ〳〵堂か蛇、　登舟

春景

霞こめてなりけりなのさしめのうち　東都　天府

二条四條の橋のいの草　九董

春の風借馬驕て嘶つる　春坡

早春　東都　不騫

鶯や啼のすみする花ほうき

ちらつく梅の白ほとの　九董

春雨の法師ゝ　あるゝ思をして　之兮

春興四句東武乾坤俳中

夕あるゝ雪ふる帝てゐて　沙羅

白魚や東へ向て孕むゝめ　月守

梅の妻我ハちらけて白ひとり　文足

動くまてを柳のやなぎ　故流

其川　芭蕉庵中

春の水日こゝろてゝ流けり　白麻

蕨のとゝ萩のもゝゝ挽ゝ名　完来

銭湯のゝ屋の柳ちる庭　蓼太

春の夜をアレ法隆寺と梅千月　東武　三駱

水あふ豆腐もあるやしろかの春、班象

春の雪ふるめの苞てからけり、嵐亭

ねちり打梅しみのもや　掌、宜麥

陽光の笠拡こしらしこのみ餅、雪万

逢侠者

足袋屋うらひ屋る初夕月　雪中庵　英太

梅ゝ長邑春の月　上総　射集

おぼろゝ誰名をたてぬ春の月　駿府　文母

梅　六句　東武浅草

八十島や一本の梅ゝ春ひろう　青李

梅のえや尾先ゝ春の色　寸来

梅ゝつおもゝみ　竹納言　一成

ぬすの手や梅の木陰ゝ春ひろう　吾徒

傘ゝ梅のひくさ軒端や梅の反　麥卒

三線ゝ梅ゝそこの酒ゝ食ゝ　成美

郊外

梅ゝ百目門足に賣家　九董

一折

行秋を誰をうのけしうの花　兎山

履の跡ちらしかねたる雪　九董

寺日比は家を志向て酒賣て　買山

物ひろふ人の金をあさし　兎

ぬくもりの縮ひ〳〵新の夕風　キ

ねんぶつ席のうらぶちり〳〵　買

寺家のてらあふなきを糸屋　兎

父なき児を墨染せん　キ

口惜しや住うしあるあるの隅　買

井へおこのれし入梅の石水　兎

あるこの松稲を栗も枝代て　キ

薩摩てらちの院主ぜうり　買

秋乃月油のふこのひみを　兎

ひとと灯を遠く垂　キ

且暮をなつかしくことにの香具こう　貫

鉢の料理をあるじする　兎

こなみの短冊さうた花の宿　キ

人〳〵をうふ主の遍　貫

塩山亭の門ちかくて

孤懐庵のあるじ

梅を友樹を友にて主乃月　其遊

駒こなして祇園清水もふの涼　鶴汀

蛙を約ちかつの清水人の

こゝふたん日の侍ふて孤庵の笠蘭　東都

雉子なく遠年も年ある淀堤　子曳

手切〳〵猫も庵に主乃雨　正朴

春興　芭蕉菴下

雪とけや枝なの萩の芽下　松宗

明けや白梅〳〵む床たゝら　其成

こゝ人ゝ帰て巴よ雉子の声　尾全

雪汁や小法つ　お原人の袖　蝶夢

甚引

咲こぼす梅雨の朝風の音（パリて） 青蘿

生酔の太刀ぶらさげおぼろ月 義仲ち 沂風

三日月の枯て荒ぬる垣の西 臥央

赤の実乃赤よりも明て天竜寺（ナコヤ） 曉星

葉ぬけの芭蕉のうへ漕く雑波舟（ナニハ） 竹阿

梅咲て根ぬけの山やひらく山（カ、） 佛仙

魂をかくす草もなつかしのあゆん（ナニハ） 二柳

のけろりの旅人眠る杖乃ゆん 蘭更

俳催馬楽

鶯と梅をさそふ雪の

のけぞりてさそふ山ひらく 蓼太

春風馬堤曲中二首

古駅 雨之家猫児書を写ふ

行て又ゆき

柳 長堤道遠く

古夜半翁

旅遊日序奥行

安倍なる都女郎や春乃水　春坡

芹摘しまのみちの凡紅　九菫

こゝろなしあらぬ指きも指閣して　買山

格子の外面はゝ吹也　坡

光さし月も西より形の昏　菫

松ゝゆみせのおくの灯朱　山

五合なとちの彩酒を所望せん　坡

られ着ていけと羽織投ちけり　菫

秋扇の恋ふ似もせ男なて　山

なもひをなるひらひら雷　坡

鉦ゝゝゝ其の場の帰蛍　菫

粮君なり又もたゞ、　山

白銀の袋ゝ抱きき旅ぶれや　坡

仕濃と食の畏畏もよ　菫

麦漬しの水に敷きし麦半分月
枝あるのうあるの籠の思灯　山
杉晴れし地蔵の尻をして　坡
茶を煮る老の色の黒ぢから　菫
鼠飛ぶ羽織りして二番鶏　山
衣をきて乃ち贅を免る　坡
貧し世ゝ力なりなを弧アリ　菫
美ゝ授る千世の太尸　山
　　坡

はあるは鴨脚をちらす山茶花　菫
片目乃鳥の飛ぶ踏ら落　山
盃の罷下　席画を　仕り　坡
ゆきゝゝ勿ゆ　俳城　菫
とまし火ゝ文ふるおかうう　こ
古ゝ四畳ゝ　自　坡
樹の数ゝ庵ゝと炉の菴　菫
ゝゝ八連ゝを止て碁を打　山

いろはうつる年のうぶすなを生　坡
唯雪のみ千ゝあるの雪　菫
不生ゝ草　歎ひらおりゝけ　山
ひさゝ〳〵枝ゝを伯母の門に　丶
あまへて方わか花の盛し　坡
紅あるゝ訛ゝ　ちまき日　孔義

伏見文音追加

ゝ三人連てひのんの食ゝ　兎山
おゝり　あるゝ見し　於蝶ゝふ　石敲
いとあるゝ藪ゝ隣ゝ家二軒　風卦
魚店ゝ鄰ゝよせて干鱈の風　俳仮
裏門ゝ先牽馬や神ゝ　波格
すゝ神の蝶ゝ世ゝ田螺ゝ　財楊
苗代ゝ十日八ゝ志ゝの星　其茂
のゝゝ植ゝ郎ゝ　鶉国

陽炎や剃飯ごとく間の宿　霞山

燕脂を摺　馬のみとちり　キ菫

むこうもうこの風ゝ聲ゝ買山

去来供

ひ来ころ饅頭ふんてゝおはろし　路人

蛋子　光琳あと

佛　諧ゝ鬼つゝもゝ

いりかやゝ去のこゝろの玉所　夜半亭

丙午春二月

洛書肆　橘仙堂梓

續一夜松前集　三月出板

同　後集　五月出板

昭和十二年十二月写終了

わたなべにより